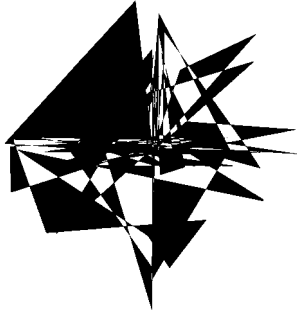


## 中東情勢分析 文化紹介



### イスラームにおける聖遺物

東京大学大学院 人文社会系研究科

教授 竹下 政孝

#### イスラームの聖遺物

今年の8月1日から9月19日まで上野の東京都美術館でトプカブ宮殿の至宝展が開催された。トプカブ宮殿に保存されている数々の秘宝がテーマ別に展示された会場は多くの人で賑わっていた。会場には、宮廷の生活を伝える日常品やハーレムの女たちの身につけた豪華な装飾品、スルタンの身につけた宝石に飾られた武具と並んで、宗教関係の品々を展示したコーナーがあった。そこに、コーランの写本、コーランの書見台、礼拝用絨毯とともに、一見宝石入れのような小箱（写真1）が展示されていた。これは預言者ムハンマドの鬚の毛を収めた小箱である。実は、トプカブ宮殿博物館には、歴代のオスマン朝のスルタンによって収集された、預言者ムハンマドに関連する膨大な遺品が貴重な宝物として保管されていて、鬚の毛もその中の



写真1：預言者ムハンマドの聖遺物(鬚の毛)入れ

一つである。厳格な一神教であるイスラームにおいて、このようなものが大切にされているとは意外に思われるかもしれないが、預言者に限らず聖者が死後に残したものは、聖遺物と呼ばれ、一般にイスラーム教徒は聖者の遺徳を偲ぶものとして大事にしている。このような習慣は決してイスラームだけに見られるものではなく、ほとんどの宗教にみられる。特に中世のカトリック世界では、ラテン語でレリクィアと呼ばれる聖遺物の崇拝が盛んであった。有名なトリノの聖骸布もこのような聖遺物の一つである。古いヨーロッパの教会にいけば、なんらかの聖遺物が宝物として保管されているのが普通である。これらの聖遺物の中でも、イエス関係のものや、聖母マリヤ、イエスの使徒たちの遺品は、もともとはヨーロッパになかったはずなので、十字軍の時代に中東からもたらされたものが多い。中世ヨーロッパで崇拝された聖者の遺物は足の骨、手の骨など遺体の一部であることも多い。人々は高名な聖者の遺物をぜひわが町の教会の宝物にしたいと競い合ったので、生きているうちに聖者として評判の高かった人が死ぬと、遺体はあっという間にばらばらにされて持ち去られたこともあったらしい。聖遺物は、アラビア語でアーサールと呼ばれる。もともとの意味は跡ということで「死者の残した跡」ということである。イスラームで聖者というのは、主に預言者ムハンマドの家族とその子孫たち、

ムハンマドの教友（ムハンマドの時代に生きたイスラーム教徒）及びスーフィーと呼ばれる神秘主義者たちである。しかし、これら聖者たちの墓は崇敬の対象になっているが、カトリックのように聖者の遺体の一部が切り取られ、聖遺物として公開されることは決してない。カトリック世界では、聖者の遺体そのまま腐敗せずに残っていて、それを信者に見せることもある。（たとえば、聖ザビエルの遺体はゴアの教会で10年に一度公開されるという）。それに対して、一般にイスラームでは遺体の公開は死者に対する冒瀆として非常に嫌われる。カイロのエジプト博物館ではファラオのミイラを公開しているが、これでさえイスラームの教えに反するものとして反対するエジプト人が多い。だから聖者の墓に詣でるといっても、遺体を見るわけではない。それではイスラームにおいて聖遺物とは具体的にどのようなものなのであろうか。本稿では、イスラームの聖遺物として最も代表的な預言者ムハンマドに関連する聖遺物のいくつかを紹介したい。

#### 預言者ムハンマドの聖遺物

アラビア語でアーサール・ナバウィヤと呼ばれる預言者ムハンマドの聖遺物には大別して、預言者の体の一部が残ったものと、預言者の使った道具や身に付けていたものが残ったものの二つがある。体の一部とはいっても、上述したようにイスラームでは遺体をバラバラにしたり、公開したりはしないので、自然に体から離れたものである。具体的には、髪の毛、鬚、歯、爪それに体の一部とはいえないかもしれないが足跡などがある。預言者の生きていた時代には、汗や唾液までも珍重されたいが、さすがにそれらが現在まで残っているという話は聞いたことがない。ムハンマドが身に付けていたものは、外套、シャツ、下着、ターバン、サンダル、杖などがある。ムハンマドが使ったも

のでは、弓矢、刀剣などの武具、預言者が水を飲んだ椀、変わったところでは、預言者が沐浴のときに使った水を入れた容器などがある。水自体は、今日まで伝わってはいない。また、特に日常品とはいえないが、イスラームにとって特に重要な意味を持つものに、預言者が聖戦に使った軍旗と預言者の印章がある。また、預言者の書いた手紙、預言者の受け取った手紙、預言者に啓示されたコーランの一節を書き留めた鹿皮も聖遺物である。これらはイスラーム世界の到る所で、宝物として大事に保管され、常時、あるいは特別の機会に信者に公開されている。これらが保管されているのは、たいていはモスクあるいは聖者廟で、中には、これらの聖遺物を保管する目的で特別にモスクが建てられることもある。現在、イスラーム世界の中で特に聖遺物が多いのは、トルコ、インド・パキスタン、それにエジプトである。預言者の活動の舞台であったアラビア半島や、初期のイスラームの政治の中心であったイラクやシリアなどの東アラブ世界にはあまり多くない。これには二つの理由が考えられる。一つは、近世、トルコにはオスマン朝、インドにはムガル朝という巨大な帝国があらわれたけれど、アラビア半島を含めて東アラブ世界には強力な王朝があらわれなかったことである。東アラブ世界にもともとあった聖遺物のほとんどは、これら両帝国の支配者によって持ち去られてしまったようである。かれらは、もともとイスラーム世界の異邦人であったために、預言者ムハンマドとのつながりを一層強く望んだのであろう。聖遺物は、イスラーム世界への新参者である彼らをイスラームの始原に結びつける絆となったのである。もう一つの理由は、インドとトルコでは、イスラーム改革主義があまり民衆にまで浸透しなかったので、改革主義者によって非イスラーム的として排斥された民衆的イスラームが中世のまま残ったことである。特に18世紀のアラビア半島にあ

らわれたワッハーブ派は、聖遺物の崇拝を激しく糾弾したので、この派の流れを汲む現在のサウジアラビアでは聖遺物をありがたがる風潮はあまりみられない。

権力の正統性の象徴としての聖遺物：

外套，軍旗，印章

現在、聖遺物を最も多く保管しているのは、トルコのイスタンブールにあるトプカプ宮殿であろう。オスマン朝のスルタンは、イスラーム世界の首長としての正統性の証として、特にこれらの聖遺物を精力的に収集したように思われる。これらの聖遺物は現在では博物館になっているトプカプ宮殿の一郭で常設展示されている。博物館の中でもこの一郭だけは、写真撮影が禁止されていて厳粛な雰囲気をただよわせている。この一郭の中でも、特に神聖なのが、ヒルカとよばれる預言者の聖外套を入れた黄金の櫃が置かれている聖外套奉安の間（写真2）である。部屋にはいつも、黒い僧衣を着たコーラン朗唱者が座っていて、おごそかにコーランを朗読している。見学者は、部屋自体に入ることはできず、ただ覗くことを許されているだけである。他の聖遺物が博物館の展示品のように普

通に展示されているのと違って、この聖外套は見ることができない。他の聖遺物は伝承経路ははっきりしていないものが多いのに対して、この聖外套は由緒正しい来歴をもっている。預言者の時代にカアブ・イブン・ズハイルという有名な詩人がいた。彼はイスラームに敵対していて、ムハンマドに対する風刺詩を書いたこともあったが、後にイスラームに改宗して、預言者の前で、赦しを乞うために、預言者を賛美する詩を詠みあげた。その詩に感動した預言者は、彼の過去の罪を赦しただけではなく、着ていた外套を脱いで彼に褒美として与えた。後に、五代目カリフで、ウマイヤ朝の祖であるムアウィヤが、この外套をカアブから購入しようとしたが、カアブは決して売ろうとしなかった。しかし、彼の死後、相続者が、カリフに2万ディルハムで売ったという。（一説では、カアブ本人が売ったともいう。また購入価格についても諸説がある）。外套は代々のウマイヤ家カリフによって継承され、さらにウマイヤ朝が滅んでからは、アッバース朝カリフの所有となった。アッバース朝カリフは、ムハンマドの杖とこの外套をカリフ権の象徴として、重要な儀式には必ず着用したといわれる。バグダードのアッバース朝が滅んでも、カリフはエジプトに外套だけは持って逃げたのであろう。エジプトにいたアッバース朝カリフの末裔からオスマン朝スルタンにこの外套は移譲されたといわれる。歴代のオスマン朝スルタンは、トプカプ宮殿を長期に離れる時には、必ず聖外套を持っていき、いつも近くに置いていた。多くのスルタンは、後述する聖軍旗とともに聖外套を携えて、戦場へと赴いた。また歴代のオスマン朝のスルタンは、毎年ラマダーン月の15日に高官たちを引き連れて聖外套奉安の間を訪れ、厳かな儀式とともに、黄金の櫃から聖外套を取り出し、恭しく口付けしたという。共和国になってから、この聖外套が一般に公開されたという話は聞かない。この



写真2：トプカプ宮殿の聖外套奉安の間

外套の形状は、丈が124cmで、表面は黒の綿で、裏地は、荒く織られたクリーム色の綿だという。右側正面の23×30cmの大きさの部分が損失しており、また、右袖部分にも小さな損失部分があるというが、外套としての形状は現在でも保っているようである。

イスタンブールには、トプカプ宮殿の他に、もう一つ聖なる外套（写真3）がある。この外套は、預言者の時代にイエメンで、預言者に一度も会うことなく、ただ預言者のことを聞いただけで、イスラームに改宗したウワイス・カラニーという聖者に、預言者が贈ったものといわれる。この外套を購入したオスマン朝の高官シュクルッラー・エフェンディは、これを保管するために「聖外套モスク」と呼ばれるモスクを建てた。この聖外套は、現在でも、ラマダーン月の間だけ一般の信者に公開される。この期間中、聖外套モスクは、参拝客で長蛇の列をなす。この外套はトプカプ宮殿のものとは違い、もはや外套としての原形は留めていない。もとの布地が、豪華な錦によって補修されたものである。

イスタンブールにある二つの外套以外に有名な預言者の外套はアフガニスタンのカンダハールにある。この外套は、アフガニスタン建国の父、アフマド・シャー・ドゥッラーニーが、中央アジア、ブハラのアミールからの贈り物として得たもので、彼の廟の近くの特別の建物に保



写真3：聖外套モスクにある聖外套

管されている。この外套も普通に見られるものではなく、国家的危機の際に、支配者によって国民の前に持ち出される。最近では、1996年4月にターリバーンの指導者モッラー・オマルがこの外套を肩にかけて説教をしたという。彼はこの聖なる外套を身にまとうことによって、預言者ムハンマドの正統な後継者であることをイスラーム世界に示したかったのであろう。

トプカプ宮殿の数多くの聖遺物の中で、聖外套と並ぶ秘宝中の秘宝はウカブ（鷲）と呼ばれる預言者の軍旗である。これも銀製の箱の中に入れて一般に展示されることはない。この軍旗も、アッパース朝の代々のカリフに継承された王権の象徴であった。アラブ世界がオスマン朝のスルタンに征服されたとき、この軍旗もスルタンの所有するところとなり、帝都イスタンブールに運ばれた。普段は、宮殿の宝物室に保管されていたが、スルタンが戦いに出征する40日前に、盛大な儀式とともに、箱から出され、王宮の内門の前に掲揚され、スルタンの遠征に携行された。ハンガリア北部のハチョヴァ（メゾケステシュ）でキリスト教国連合軍と戦ったメフメト3世は、ほとんど敗走の危機に瀕したが、預言者の外套を身にまとい、預言者の軍旗を掲げて決死の覚悟で踏みとどまった。これをみて、兵士たちが奮起し、奇跡的な勝利をおさめた。軍旗が持ち出されたのは遠征のときだけではない。オスマン朝の後期には、兵士たちの規律が墮落し、叛乱が頻発したが、その時にも鎮圧のために、聖なる預言者の軍旗が持ち出された。この軍旗に刃向かうことは、預言者に刃向かうことであり、イスラームに刃向かうことであるとみなされたからである。ちょうど維新戦争のときの錦の御旗と同じような役目をはたしたのであろう。この由緒ある軍旗も元のもものは、年月には勝てず、ぼろぼろになってしまったが、オスマン朝では、この元の軍旗の一部を織り込んで、元の軍旗のいわば複製を3つ作

った。これらの複製の軍旗も、またぼろぼろになってしまった元の軍旗も大切な宝物として、現在では、トプカブ宮殿の聖外套奉安の間に大切に保管されている。

初期のカリフたちによってムハンマドの正統な後継者であることの象徴として使われた聖遺物の中には、現在では失われてしまったものも多い。たとえば預言者の杖は、アッパース朝のカリフによって、聖外套とともに重要な儀式で使われたが、現在まで伝わってはいない。正統な権力の象徴として使われた預言者の遺品の中で非常に早く失われたものに、ムハンマドの使った印章がある。そこには「神の預言者ムハンマド」という3語だけがアラビア語で刻まれており、預言者はこの印章を指輪のように指にはめていたという。文盲だったとされる預言者は、重要な文書に署名するときこの印章を使った。この印章は、初代カリフ、アブー・バクル、二代目カリフ、ウマルへと継承されたが、三代目カリフ、ウスマーンのとくに井戸に落ちてしまった。カリフは3日間井戸の中を探させたけれど、印章はついに出てこなかった。それで、ウスマーンは同じような印章を作らせて、それが、ウマイヤ朝、アッパース朝と代々のカリフに継承され、最後にオスマン朝のスルタンの手にするところとなった。この印章もトプカブ宮殿博物館に展示されている。

#### 御守りとしての聖遺物

外套と軍旗がイスラーム的支配の正統性の象徴として、いわば、天皇の三種の神器のイスラーム版という趣があるのに対して、預言者の髪の毛、鬚、足跡はかなり数も多く、個人的な御守りとして使われていたようである。これらの預言者の体の一部は、預言者の生前から信者たちが御守りとして使っていたらしい。前述したウマイヤ朝第一代カリフのムアーウィヤは、次のような遺言を残した。「預言者は一度私に（ご自

身の）シャツを着せてくれた。私はそのシャツをとっておいた。またある日、預言者は爪を切っておられた。私はその爪を集めて、壘にとっておいた。私が死んだら、そのシャツを着せてくれ。また、預言者の爪を粉にして、私の両眼と口にふりかけてくれ。そうすれば、神はそれらの祝福された力（バラカ）によって、私に慈悲をおかけくださるかもしれない。このムアーウィヤの遺言は、望みどおり実行されたという。このように、聖遺物は、所有者とともに埋葬されることも多かった。「バラカ」とは、一般に聖者がもっているとされる呪力で、この力によって、願い事がかなったり、病気が治ったりすると信じられている。聖者のお墓へ参詣するのは、バラカを求めるからであり、聖遺物が御守りになるのもバラカがあるからである。聖遺物に対する崇拜が特に盛んなインドでは、聖遺物はタバールカート（バラカを与えるもの）と呼ばれている。

またある伝承では、預言者自身が、巡礼が終わった後に剃りおとした髪の毛を信者にわけあたえたという。（メッカへの巡礼行事を行っている期間は、身体に刃物をあてることは禁止されているので、ひげを剃ることも爪も切ることもできない。巡礼が終わったら、精進落としということで男性は剃髪することが普通である）ムハンマドの髪の毛は一本残らず、信者によって集められたという伝承もある。また預言者は、礼拝前の浄めをおこなったときに使った水を瓶にいれて、遠国から来ていた信者に与えたこともある。預言者は「この水をあなたの国にもって行って、そこにモスクを建てる時にこの水をふりかけなさい」と指示した。ムハンマドの髪の毛もモスクを建築するときに基礎として使われた。仏教で、舍利とよばれる釈迦の遺骨が、多くの仏塔の基礎として使われることに似ている。日本の五重の塔にもその基礎には必ず釈迦の舍利があることになっている。釈迦の遺骨が

拡散することで釈迦の教えが広がっていったのである。ムハンマドの聖遺物も同じような役割を果たしたのであろう。

聖遺物の中でも変わり種は足跡である。足跡は、とても後世には残らないような気がするが、ムハンマドが石の上を歩くと、石に足跡が残ったといわれ、これは預言者の奇跡の一つであると考えられている。石の上に足跡を残したのはムハンマドだけではなく、イスラームの聖地メッカのカーバ神殿の前には、ムハンマド以前の預言者であるアブラハムの足跡がある。カーバ神殿はアブラハムが息子のイシュマエルと一緒に建てたもので、彼が建築を指図するために立っていた岩の上に残った足跡だという。ムハンマドの足跡はイスラーム世界各地に数多く残されている。最も有名なものは、エルサレムの岩のドームにある足跡（写真4）で、ムハンマドがここから天上へと昇ったという奇跡のときに残した足跡だという。トプカプ宮殿にも6つの足跡が所蔵されている。また、足跡は複製が簡単なもので、紙に描かれたり、木や金属で形取りされたりすることも多い。これらの複製も簡便な御守りとして使われたのであろう。このような聖なる足跡というと、我々には仏足石が思い起こされるが、同様の信仰が世界各地にみられることを南方熊楠が「ダイダラハウシの足跡」という随筆の中で豊富な例をあげて示している。中でも興味深いのはスリランカのアダムス・ピーク（仏足山）の頂上の岩にある巨大な足跡で、イスラーム教徒はこれをアダムの足跡、仏教徒は釈迦の足跡だとみなし、二つの宗教の聖地となっていることである。アダムは天国から追放されて、地上に落ちてきたとき、最初にスリランカのアダムス・ピークに到着したという伝承がイスラームにはある。このときアダムの身長は40メートルを超えていたので足跡も巨大なのである。



写真4：紙の上に描かれたエルサレムの岩のドームにある預言者の足跡（トプカプ宮殿博物館所蔵）

最後に一般のイスラーム教徒にとってムハンマドの聖遺物はどのような意味を持っているかについて考えてみたい。他の諸宗教では、信者は図像表現を通じて時代を遠く隔てた開祖の姿に触れることができるのに対して、イスラームではムハンマドの図像表現は許されてはいない。聖遺物は、彼の残した言葉（ハディース）とともに、時代を遠く離れて生きる信者たちが敬愛する開祖と結びつくための手段ではないのだろうか。信者たちは、預言者の言葉を熱心に収集し、記憶し、伝承していったのと同じように、預言者の聖遺物を収集し、伝えていったのであろう。